

## ブルターニュにおけるナシヨナリズムの誕生（三）

——『バルザズ・ブレイス』以前のラヴィルマルケ——

梁 川 英 俊

### VII ブルターニュ像の変遷

#### 一八二〇年代のブルターニュ像

さて、ラヴィルマルケがラリュ神父の著作に触発されてブルトン文学に関する研究を始めた一八三〇年代は、またフランスに新しいブルターニュ像が生まれようとしていた時代でもあった。つまりラヴィルマルケの野心とは、ある意味でそうした時代の趨勢に乗ったものだったのであり、けっして純粹に個人的な動機のみから発したものではなかった。しかしこうしたブルターニュをめぐる新しい動きについて触れるまえに、まずはここでそれ以前に流布されていたブルターニュ像に一瞥を投じておかなければならない。それはどのようなものだったのか。

すでに述べたように、革命後の行政調査に端を発する地方の習俗への関心は、ケルトにたいする関心の高まりと相俟って、ブルターニュにおいてはカンブリーの旅行記を生み、またケルト・アカデミーの設立を促しもした。こうしてブルターニュはケルトの地として人々の盛んな好奇心を惹きつける一方、またケルトマニアと呼ばれる人々の怪しげな言説を招き

寄せることにもなった。その後ケルト・アカデミーが解散し、一八二〇年代に入ると、ブルターニュに関する著作は数を増し、質的にも高まった。ジャンルも歴史、経済、文学、政治的パンフレット、考古学など多岐にわたった。が、そのなかで、広く大衆にたいしてブルターニュのイメージを決定づける役割を果たしたものとえば、それはやはり文学作品であった<sup>(1)</sup>。

ブルターニュのイメージはまず「恐怖小説」とともに広がった。英国のラドクリフ夫人やウォルター・スコットなどが、スコットランドやアイルランドを背景に描いたこの文学ジャンルは、フランスでも少なからぬ模倣者を生み、一八二〇年代から三〇年代にかけて一時的な流行を見た。そして、その格好の舞台となったのがブルターニュだったのである。こうしてブルターニュには「予期せぬ出来事が起こる恐ろしい場所」という不気味なイメージが定着することになる。地形や気候風土の問題もあつたろうが、「ふくろう党」の記憶もどこかで影響していたのであろう。しかし、そうした小説で描かれるブルターニュはしばしば恣意的で正確さを欠いていた。

たとえば、当時流行した作家イッポリット・ボヌリエ Hippolyte Bonneier の『サン島の老女』 *Les Vieilles femmes de l'île de Sein* (一八二六年) を見よう<sup>(2)</sup>。このウォルター・スコット風の小説は、一八二五年、著者がフランス地理協会から派遣されてサン島の調査に訪れたときの経験をもとに執筆されたものだったが、この島には情夫のいる女性に石を投げつける習慣があるのだの、フィニステール県の仕立屋はドルイドの継承者でギリシヤ語から派生した特異な言語を話すのだのよそ現実とそぐわぬ奇妙な記述が目についた<sup>(3)</sup>。こうした記述の出典は大方がカンブリーの旅行記であつたが、この小説にかぎらず当時ブルターニュについて書かれた大衆向けの作品は、相変わらずそのほとんどがこの書物に依拠していたのである<sup>(4)</sup>。しかも、そうした作品がブルターニュに関するネガティブなイメージを広める上で果たした役割は、けっして小さくはなかつた。

ここで一八二九年に若きバルザックが発表した『ふくろう党』*Les Chouans* を紐解こう。ブルターニュの反革命的抵抗運動と共和国政府軍の戦いを軸に展開されるこの小説は、流行の恐怖小説の影響を随所にとどめながら、当時流布していたブルターニュにまつわる大衆的なイメージの一端を知らせてくれる。バルザックはまずこの地方をこう紹介する。

ブルターニュはフランス全体のうちで、ガリア人の習俗がもつとも深い痕跡を残している地方である。(……) だから彼らの生活は古代の信仰と迷信的な行いの名残を強くとどめている。ここでは封建時代の慣習がいまだに重んじられている。考古学者たちはそこになおドルイドの遺跡が立っているのを発見する。そこでは近代文明の恩恵も、広大な原始林の前に、怯えて浸透しかねているのである。(……) ブルターニュはヨーロッパの中央に位置しているため、カナダよりもはるかに興味深い観察対象となっている。文明の光に囲まれながら、その温かい恩恵にはあずかっていないこの地方は、あかあかと燃える炉のなかに埋もれ、黒いままでいる冷たい石炭に似ている。未知の宝を豊富に抱えたこのフランスの美しい地域を、社会生活と繁栄とに導こうとして、才能ある人がいくら努力をしてみても、太古以来変わらぬ風習にとらわれた住民たちの停滞のなかでは、どれもこれも、政府の試みでさえ、すべてが徒労に終わってしまうのである(60)。

すなわち、文明の光の届かない未開の地。これがバルザックが読者に提示したブルターニュだった。しかもその印象は登場人物のひとり、マルシユ・ア・テールの存在によってさらに増幅される。たとえば、このブルターニュの農民は徹底的に動物との比較で描かれる。その声は「このあたりの谷間に住む農民が羊の群れを集めるのに使う角笛」のようであり、頭は「牛の頭と同じくらい大きく」、目鼻立ちも「われらが美しきカフカス人種のものというよりは草食動物のそれに近

い」。のみならず、その長い髪もまた「雌山羊の毛皮の毛と似て」おり、腰から下を包むのは「この地方でビックと呼ばれる雌山羊の毛皮」なのである。しかも、この獣が紛れもないブルトン人であることを、バルザックはつぎのような描写によってさらに印象づける。

彼は道端に静かに腰を下ろし、上っ張りから薄い黒ずんだソバ粉のガレットを何枚か取り出して、間抜けのように無頓着に食べはじめた。この食べ物はこの土地特有のもので、そのもの悲しい風味はブルトン人にしかわからないのである。この男には知性というものがひとかけらも備わっていないように思われたので、こうした状況のなかで士官たちは彼を、谷間の肥沃な牧草地で草を食んでいる動物の一匹に喩えたり、アメリカの未開人や喜望峰の土着民に喩えたりするのだった<sup>(6)</sup>。

ブルトン人が擬せられたのは動物ばかりではなかった。彼らはまた他の地域の未開人、とりわけ「北米インディアン」や「モヒカン族」とも比較され、「知的な面では北米のモヒカン族やインディアンに劣るが、偉大さ、狡猾さ、峻厳さにかけては彼らにひけをとらぬ人々<sup>(7)</sup>」だの、「モヒカン族が戦うのと同じ流儀で、神と王に仕える未開人<sup>(8)</sup>」だのと言われもした。当時流行していたアメリカ人作家フェニモア・クーパー *Fenimore Cooper* のインディアン小説を念頭においているらしい作者は、おそらくブルトン人を使ってそのフランス版をつくろうとでも意図していたのだろう<sup>(9)</sup>。いきおい現実のブルターニュは遠ざかり、オート・ブルターニュの東端フージェールとその近郊を舞台としながらその住人がブルトン語を話すなど、小説には不自然な点も多くあった。作者がわざわざ現地に足を運んだにもかかわらず、である。

一方、こうしたパリでつくられるブルターニュ像を、当のブルトン人はどう受け取っていたのだろうか。もちろん、彼

からも黙っていたわけではなかった。ここでひとつの雑誌の存在を強調しておこう。一八二三年にナントで創刊された月刊誌『リセ・アルモリカン』*Le Lycée armoricain*である。

わが声に立ち上がれ、アルモリカの息子たちよ！

汝らが古代の栄光の名残を集めよ。

祖国は言った。祖国を守る人々に従い、

闘技場に下り、勝者となって戻れ<sup>(10)</sup>。

こうした勇ましいことばで始まる「呼びかけ」を創刊号に掲載したこの雑誌は、王政復古期におけるブルターニュの唯一の総合的文化雑誌として一八三二年まで精力的に活動した。

主宰者の名はカミーユ・メリネ *Camille Mellinet*。ナントの市議会議員を務め、また土地の少なからぬ學術団体の会員でもあったこの人物は、また名うてのオルレアニストとしても知られていた。その彼が母方から受け継いだ出版社で発行しようとしたのは、哲学、自然科学、文学、美術など、政治以外のすべてをテーマとする総合誌であった。実際、この雑誌に特定の政治色はなく、執筆者の顔ぶれも多様であった。しかしその大半はいわゆる名望家であり、また世代的にもほとんど同じであるという点で、彼らの間にはいわば社会的な共通性があった。

彼らは自らを「ブルトン人」と称し、パリの作家たちが時流の応ずるままにブルターニュにたいして生産し続けるイメージと、彼らの純粹に学問的な著作との間に厳しく一線を引こうとした。しかしこうした主張は、実際にはあまり有効なものとは言えなかった。というのも、『リセ・アルモリカン』に寄稿される民俗学的な仕事自体が、そもそも未開と文明と

いう構図に従ったものであり、しかも好んで未開な側面を強調するという点で、かつてのケルト・アカデミーのそれと似たり寄ったりなものだったからである。つまりその意図するところとは別に、実際にはこうした著作はパリにおけるブルターニュのステレオタイプなイメージの生産に一役買っていたのである。批判する側が批判される側の土俵を知らずに肯定するという、典型的な構図がここにはあった<sup>(11)</sup>。

こうした構図に明らかに変化が起き、この地方にたいするポジティブなイメージが生成されるようになるのは、一八三〇年代に入ってからである。そのときブルターニュは、パリと相對するのではなく、むしろパリを経由することによって新たな表象を獲得しはじめるのである。

パリのブルトン人作家 — ブリズーとスーヴェストル

きっかけとなったのは、一八三二年に発表されたオーギュスト・ブリズー *Auguste Brizeux* の詩集『マリー』 *Marie* であつた。

ああ、マリーがやってくるとき、あるいは日曜日に、

晩課のとき、彼女の白いドレスが輝くのを見るとき、

亜麻のコワツフになかば顔を隠して、

教会の門口に彼女がやってくるとき、

私は喜んで永遠の聖処女を見ているのだと思ひもしたろう<sup>(12)</sup>。

この作品は七月革命の余韻が残るパリの読書界にセンセーションを巻き起こす。おそらく、コワツフを被った信仰心に篤い純朴な少女の姿は、革命で疲れた人々の心を慰藉するものであったに相違ない。

作者ブリズーは一八〇三年、ロリアンの生まれ。一八二四年に法律の勉強をすべくパリに出るが、ラマルチーヌやユゴーが活躍をはじめるロマン主義の雰囲気なかで、やがて法律を放棄して文学を志望するようになる。当初作者の名を冠さずに出たこの詩集は、故郷の一少女への憧憬を歌い、ブルターニュのイメージを「恐怖小説」の舞台から、懐かしい清らかな田園地帯へと大きく転回させることになった。マリーは一躍ブルターニュの新しい代名詞になったのである。

ところで、この詩集で歌われていたのは恋愛や田園風景だけではなかった。そこにはいまひとつの重要なテーマがあった。離郷と上京による故郷の発見という物語がそれである。つまり詩人Ⅱ語り手はブルターニュを離れて首都に移り住んだのち、望郷の念とともに新たに故郷に出会うのである。

この巨大なパリは、宿命的な騒乱を抱え、

休息も、穏やかな陽気さも、すべてがそこに呑み込まれてしまう

そしてひとはこの街を呪いつつ、そこから抜け出すことはできないのだ<sup>(13)</sup>。

(……)

今宵若者は悲しんでいる。都会は

まるで囚人のように彼を壁のなかに閉じ込める。

ただひとり、暖炉の前で、煙をあげる薪を見ながら、

彼は霧の立ち込める仄暗いアルヴォールを想う<sup>(14)</sup>。

詩人はパリに来ることによって、かつて顧みることもなかった故郷の風景を、描かれる価値のあるものとして再発見する。マリーとは都会の喧騒と憂鬱のなかで浮かび上がってくる、このブルターニュの象徴と言ってもよかった。ブリズーは言う。

ブルターニュについて正確な知識をもっている人はとても少ない。素朴な人たちの真価を知るためには彼らのなかで育ち、早くから彼らの言葉を話し、食卓をもにするとという経験が必要だ。そのとき彼らの秘められ隠されていた詩情が、その風俗の本来の魅力が姿を見せるのである<sup>(15)</sup>。

パリの作家が描く紋切り型のブルターニュではない、ブルトン人による真正のブルターニュが求められはじめていた。そしてその傾向を後押ししていたのは、エキゾチックな地方色を求めてやまないロマン主義の気運だったのである。

さて、こうした風潮のなか、いまひとりパリを経由してブルターニュに目覚めた作家がいた。『最後のブルトン人』*Les Derniers Bretons*の著者エミール・スーヴェストル *Emile Souvestre* である<sup>(16)</sup>。

一八〇六年、モルレーに生まれ、ブリズーより三歳年長であったスーヴェストルは、レンヌで法律を学んだのち、文学を志して一八二六年にパリに上る。そこで当時文壇に大きな影響力をもっていた同郷の劇作家アレクサンドル・デュヴァル *Alexandre Duval*<sup>(17)</sup>を頼って自作の戯曲を上演しようとするが、志かなわず、絶望した彼はついに文学への野心を捨て去る決意をする。そんななか心労で病に倒れた彼に、懐かしい故郷の風景が蘇る。

そのとき私の疲れた魂は昔の思い出に浸りはじめた。私はわが緑のブルターニュを本当に懐かしがりはじめていたの

だ<sup>(18)</sup>。

ある日、通りすがりに出くわしたブルターニュ行き馬車に飛び乗ったスーヴェストルは、そのまま逃げるようにパリを後にする。故郷に帰った彼を待っていたのは、見なれたはずの風景が発する新しい魅力であった。

ちょうど春先であった。ブルターニュは汚れない美しさで私の前に現れた。(……) 私はそれまでとりたてて注意して見たことのなかったこのブルターニュを賛嘆の念で見つめた。(……) 私はまるでひとりの女性を愛するかのようブルターニュを愛しはじめた。そしてその秘密、もつとも甘美でありながら知られること少ないその魅力をもつと知って欲しいと思った<sup>(19)</sup>。

こうして彼はブルターニュの調査に乗り出す。つごう六年にわたったこの仕事の間、スーヴェストルは数年をナントで過ごし、地元の書店の店員として働いた。ところでこの書店こそは、ほかならぬ『リセ・アルモリカン』の刊行元であるカミーユ・メリネの書店であった。スーヴェストルはこの雑誌に執筆者として名を連ねる一方、この書店から三冊の著書を出版したのである<sup>(20)</sup>。

さて、のちに『最後のブルトン人』としてまとめられるスーヴェストルの仕事の成果は、批評家サント・ブーヴの紹介で、一八三三年九月から雑誌『両世界評論』*La Revue des Deux Mondes* に順次発表されていく。ブルターニュに関するはじめての信頼できる記述が、フランスでもっとも権威ある雑誌のひとつに掲載されたことは、パリのブルトン人の間で大きな話題となったに相違ない。ちなみにこの雑誌には、同年十一月一日にもブルターニュを主題としたミシユレの『タブ

ロー・ド・ラ・フランス』*Tableau de la France*の第一章が掲載されている。これまたブルトン人にとって慶賀すべき出来事であったに違いない。

翌一八三四年十二月一日、『両世界評論』はスーヴェストルの連載の三回目を掲載する。『ブルターニュの民衆詩』*Poésies populaires de la Bretagne*と題されたそれは、故郷の民衆によつて謡われている歌を仏語訳で紹介したものであった。もちろん、すでにパリに来てクルシー兄弟の屋根裏部屋に出入りしていたラヴィルマルケがそれに目を通さなかつたはずはない。しかも、その読書は間違いなく彼に大きな刺激を与えるものだった。

先に引いた彼のラリュ神父への手紙が、このスーヴェストルの論考が『両世界評論』に掲載された十日後に書かれていることが、なによりも雄弁にそれを物語っている。

## VIII パリからブルターニュへ

### ブルターニュにおける民衆歌の収集

さて、たしかにラヴィルマルケはスーヴェストルの論考から刺激を受けた。しかし、彼は民衆歌の収集というアイデアまでスーヴェストルからもらったわけではなかつた。というのも、ラヴィルマルケはすでにこの年の夏から故郷で収集をはじめているからである<sup>(2)</sup>。つまりスーヴェストルの論考は、やがて『バルザズ・ブレイス』として結実するラヴィルマルケの計画を加速させこそすれ、それに根本的な影響を与えるものではなかつた。しかも収集に関しては、彼にはすでに母親という身近な先例がいたのである。

もつとも、当時ブルターニュで民衆歌を収集していたのは、むしろ彼の母親のみではなかつた。カンブリーがオシアン

風の歌を探しもとめたことはすでに紹介したが、一八二〇年代になると、とりわけ貴族のあいだですぐれた収集を行う者が多く現れた。のちに『ケルラスの跡取り娘』*L'Heritière de Keroulas*として広く知られることになるバラードの歴史的な起源を跡づけたエマール・ド・ブロワ Aymar de Blois、トレゴール地方で十六世紀の出来事を伝える歌を収集したジャン・フランソワ・ド・ケルガリウ Jean-François de Kergarion、エマール・ド・ブロワと同じ村の住人で、たぶん彼の影響で一八一五年頃から収集をはじめたラヴィルマルケの母親と同世代の女性収集家バルブ・エミリー・ド・サン・プリ Barbe-Emilie de Saint-Prix、おもにブルターニュの聖人に関する歌を集めたダニエル・ルイ・ミオルセック・ド・ケルダネ Daniel Louis Miorcec de Kerdanetなどがそうした収集家の第一世代であったが、ラヴィルマルケと同様に一八三〇年代になってから収集をはじめた世代にも、ジャン・マリー・ド・ペンゲルン Jean-Marie de Penquern のように二十年にもわたって地道な収集活動を続け、膨大なコレクションを残した者もいた<sup>22)</sup>。

しかし彼らとって収集とはあくまでも趣味の一環であって、自らのコレクションをあえて世の中に公表しようと考える者は誰もいなかった。それゆえ彼らは世間的に見れば無名であり、集められた歌も狭い愛好家のサークルを越えることはまずなかった。稀にその一部が紹介されることはあっても、それは『リセ・アルモリカン』や『ルヴュ・ド・ブルターニュ』などの地方誌に限られており、こうした歌を全国的な雑誌で紹介したのはスーヴェストルがはじめてだったのである。そして、彼の論考がラヴィルマルケに与えたもつとも重要な刺激も、おそらくはそこにあった<sup>23)</sup>。

ところで、ブルターニュの民衆歌は、おおまかに三種類に分類される。まず「グウェルス」*gwerz*と呼ばれる神話や歴史上の出来事に材をとった歌、「ソーン」*son*と呼ばれる恋愛歌や子守唄などの生活歌、そして「カンティーク」*kantik*と呼ばれる宗教歌である。こうした歌のなかでとくに収集家の興味を惹きつけたのは、なんといっても「グウェルス」であり、ラヴィルマルケの収集活動の中心ももちろんそこにあった。

さて、ラヴィルマルケは一八三四年から一八三八年まで、毎年夏になると故郷に帰り、集中的に収集活動を行った<sup>(24)</sup>。当初、収集の範囲はおもに郷里のニゾンとその近郊であったが、おそらくは貴族特有の交友関係に導かれて、ほどなく彼の足はそれ以外の地方へも向かうようになる。

なかでも注目すべきは、彼がさきに紹介した収集家の全員のもとに赴いていることである。一八三五年九月にはレオン地方のレヌヴァンにケルダネを訪ね、ラヴィルマルケが紹介する最初の民衆歌となる『エリアンのペスト』*La Peste d'Elliant*に関する情報を交換し、翌三六年にはサン・プリ夫人を訪問して、のちに『バルザズ・ブレイス』の重要な一部をなすことになる『ガンガンの包囲』*Le Siège de Guingamp*と『メルラン・バルド』*Merlin-Barde*の散文ヴァージョンを提供されている。さらに詳細は不明だが、トレにペンゲルンを、プルジャンにエマール・ド・ブロワを、ラニヨンにケルガリウを訪ねてもいる。おそらく彼らからもさまざまな貴重な情報を受け取ったに相違ない。いずれにせよ、ラヴィルマルケのフィールドノートは一八三七年の夏にはすでに三百ページの厚さにふくれあがっていたという<sup>(25)</sup>。

では、こうした収集を通して彼はいったい何をしようとしていたのだろうか。それは、ラリュ神父が示唆した「トルヴェールに称賛されたアルモリカの原典」を、民衆の記憶の中に求めることであった。しかしこの展開は、おそらくラリュ神父からすれば予想外のものだった。というのも、神父はたぶんそれをせいぜい「写本」という形でしか想像していなかったはずだからである。もちろん、ラヴィルマルケもその可能性を考えなかったわけではなかった。それどころか、彼は実際に一冊の写本を探し求め、その過程である事件に巻き込まれてもいたのである。

## ガンクラン事件

問題となった写本とは、五世紀にアルモリカにいたと伝えられるガンクラン *Guinclan*<sup>(26)</sup> というバルドの予言を書きと

めたとされるブルトン語の写本であった。この写本について、たとえば一七三二年に出版されたグレゴワール・ド・ロストルナン *Grégoire de Rostrenen* の『ケルト・ブルトン事典』*Dictionnaire celtobreton* は、しばらくランデヴェネックの僧院に保管されていたが、革命後の混乱によって行方不明になってしまった、と伝えていた。

それがにわかには話題に上るようになるのは、一八三五年。発端は、この年の七月二十一日に、公教育相がフィニステール県の知事に出した一本の通達にあった。それは革命によって四散したランデヴェネックの僧院の写本、とりわけガン克蘭の写本を探すよう命じていた<sup>27</sup>。おそらくこの通達の噂は、すぐにブルターニュの好事家の間にも伝わったに相違ない。実際、この年の九月に、ラヴィルマルケはこの写本についてミオルセック・ド・ケルダネに手紙で訊ねている。ちょうどレヌヴァンに彼を訪問し、プレシの自宅に戻った後のことであった。ケルダネはその著『年代順略述』*Notices Chronologiques* でこのバルドについて幾らかスペースを割いていたから、なにか情報を得られるかもしれないとも思ったのだらう。

ところで、このとき歴史建造物視察官という肩書きでフィニステール県を訪れていたのが、作家のメリメであった。すでにモルレー、ユエルゴアト、サンポル・ド・レオンと視察してきた彼は、九月半ばにカンペールに到着し、そこで知人のルイ・ド・カルネから、とうとう問題のガン克蘭の写本が見つかったと知らされる。しかも、カルネはその発見者として、ラヴィルマルケの名を挙げたのである<sup>28</sup>。

この出来事をいち早く報じたのが、ナントの新聞『エルミーヌ』*L'Hermine* であった。この正統王朝派の新聞は十月十六日付けで、ラヴィルマルケが「モンターニュ・ノワールの教会で、古い財産目録のなかから、長年行方が知れず、その断片しか知られていなかったブルターニュの古のバルド、ガン克蘭の詩<sup>29</sup>」を発見したと伝えた。そればかりではない。同紙は数日後、ラヴィルマルケが発見した写本は、メリメによって横取りされたとも報じたのである。

むろん、これは完全な濡れ衣であった。しかし『エルミーヌ』のみならず、パリとブルターニュの正統王朝派の新聞はこぞつてこの事件を取り上げ、好んでメリメを悪玉に仕立て上げた。当時、正統王朝派にとって、ルイ・フィリップ側の人間は誰であろうが敵だったのである。

一方、そこでラヴィルマルケが演じていたのは、ブルターニュから貴重な写本を奪い取ろうとする権力の代表者によって騙された純真な青年という役回りだった<sup>(30)</sup>。そしてこの強奪者と犠牲者というメリメとラヴィルマルケの関係は、そのまま正統王朝派の目から見たパリとブルターニュの関係を反映してもいたのである。なかでも際立っていたのが、パリの正統王朝派の週刊誌『モード』*La Mode*の反応であった。この雑誌は「手厚いもてなしを受けながら、われわれの金で馬車に乗って優雅に」旅をするメリメたちを慢罵し、「われわれは無益な人間のために高い金を払っているのだ<sup>(31)</sup>」と嘆じていた。

こうした経験がメリメにとって愉快であったはずはない<sup>(32)</sup>。彼はパリに戻るとラヴィルマルケの居場所を探し当て、真相を知るべく会見を申し込む。メリメが友人に宛てた手紙にはこうある。

古文書学校の学生は写本を見つけたと言い張った。しかしそれを見せろといっても見せることはできなかつたし、もう手元にないという。ではそれがどのくらいの分量で、どんな性質のものだったのかと聞いても、彼は答えられなかつた。私は彼が私以上にそれを見てはいないのだと確信している<sup>(33)</sup>。

同じ手紙のなかで、メリメは「ここ（ブルターニュ）の女性を掴むにはピンセットがいる」だの、「ブルトン語は悪魔が発明した言語」だのとブルターニュのことを悪し様に言い、「いずれレポートのなかで仕返しをするつもりだ<sup>(34)</sup>」と書

きつけている。そうである以上、この会見がラヴィルマルケにとっても愉快なものであったはずはなかった。ともあれ、この「ガンクラン事件」は、こうして当事者同士の間にしこりを残したまま、とりあえず終結を見ることになるのである。さて、ではランデヴェネックにあったはずのガンクランの写本は結局どうなったのか。公教育相よりこの写本の探索を命じられたフィニステール県の知事は、一八三五年九月十日、シャトーランの副知事宛に協力を要請する手紙を書き、副知事は同年十二月十日付の返信のなかでつぎのように答えていた。ランデヴェネックの図書館にあったもののうち、重要なものは革命の際に郡長所在地に移され、ガンクランの「ブルトン語の歌」もしばらくは僧院の使用人の手にあったが、彼は最近貧困のうちに死に、そのまえにすべてを売り払ってしまった、と<sup>35</sup>。

## ケルトの再評価

では、そもそも公教育相はなぜこの写本に興味を示したのだろうか。おそらくその背景にあったのは、この時代に明らかになりつつあったフランス語とフランス文学の形成におけるケルトの地位の高まりであった。

もちろんフランス語とフランス文学がどこに起源をもつかという論争は、すでに十八世紀半ばからおこなわれていた。そこで定説となっていたのは、フランス語は俗ラテン語から派生したもので、もともと大陸で使われていたガリア語なしはケルト語はローマ支配の間に消失し、この言語の形成にはなんら寄与しなかったという説であった。すでに紹介したペズロンやルブリガンやラトゥール・ドーヴェルニユはこの定説に反旗を翻した数少ない人たちであったが、ケルト・アカデミーの解散後、こうしたケルト支持者の存在はさすがに影が薄くなっていた。

文学の領域でも、プロヴァンス文学こそフランス文学のみならずヨーロッパの文学の起源であるというのが定説であり、しかもそれはフランソワ・レヌアール François Raynouard やクロード・フォリエル Claude Fauriel のような大学者のお墨

付きを得てもいた。もつとも、その梓に収まり切らぬものがひとつあった。「円卓物語」である。この広範囲に伝播した物語の起源については、スカンジナビア説やアラブあるいはペルシャ説など諸説があったが、いずれも確たる根拠に乏しかった。こうしたなかで、おもにイギリスの学者の研究を通して徐々に信頼を獲得するようになったのが、そのケルト起源説であった。

たとえば、ベネディクト派修道僧によって一七三九年に刊行が開始された『フランス文学史』 *Histoire littéraire de la France* を見よう。この書物は一七六三年にいったん中断されたが、一八一四年、「碑文アカデミー」の援助の下に再開され、第十三巻が十二世紀半ばから書き継がれることになった。そこでは、十二世紀のアングロサクソンの詩人が言及され、わけでもジェフリー・オブ・モンマスの『ブリタニア列王史』の執筆にアルモリカで発見されたブルトン語のテキスト *Brut y Brenned* が使われた可能性が指摘されていたが、ことフランス文学の形成という問題になると、重視されていたのはやはり圧倒的に南仏文学であった。

ところが、この『文学史』は一八二四年頃から徐々にその比重を北仏文学、すなわちトルヴェールの文学へと移し、やがてガリアの伝承はアルモリカのバルドに伝えられたのだという仮説を大々的に展開するようになる。こうした伝承が、おそらくは円卓物語やマリー・ド・フランスのレーなどに素材を提供したのであり、しかもその伝播には、アルモリカのみならず、その民族的起源を同じくし、中世にあつても変わらぬ交渉があつたウェールズもまた貢献したというのである。では、こうした論調の変化はなぜ起こつたのだろうか。きっかけは、ほかならぬラリーユ神父の著作にあつた。一八二四年から『フランス文学史』でトルヴェールに関する記述を担当したのは、アモリー・デュヴァル *Amaury Duval* という人物であつたが、『デカド・フィロゾフィック』 *Décade philosophique* の編集者で観念論の影響を受けたこの人は、古典主義とギリシャ・ローマ文学の信奉者であつたにもかかわらず、このラリーユ神父の書物と出会ふや、それまで何十年もまつた

く関心を払ってこなかったケルトへと転向したのである。

かくて一八三五年に出版された『文学史』第十八巻は、フランス文学の起源をめぐる南と北の対立の問題を、レヌアールとラリュ神父のそれぞれの説に代表させて詳細に紹介することになる。この問題は、一八三八年に刊行された次巻（最終巻）においても取り上げられ、アモリー・デュヴァルはそこでも「ブリテン島とブルターニュで大昔から伝えられていた伝承や太古から歌われていたレーが「アーサーもの」や「円卓物語」の源泉となったことは、もはや疑い得ないように思われる<sup>(36)</sup>」と力説した。

ラヴィルマルケが民衆歌の収集をはじめたときのケルトをめぐる学的状況とは、このようなものであった。むろん彼の役割は、こうした南と北の綱引きのなかで、少しでも北に有利になるように動くことだった。ラヴィルマルケは一八三五年十一月、「ヨーロッパ歴史会議」で「ケルト語とケルト文学はフランス語とフランス文学の形成にどんな役割を果たしたのか」というテーマで発表を行ったのを皮切りに、以後正統王朝派の雑誌『エコー・ド・ラ・ジュニーヌ・フランス』を中心に盛んに寄稿を繰り返していく。

## IX ナシヨナリスト・ラヴィルマルケ

### 『ブリズー』

『エコー・ド・ラ・ジュニーヌ・フランス』*Echo de la Jeune France* はアルフレッド・ネットマン Alfred Nettement の編集になる月二回発行の絵入り雑誌であった。文学、歴史、哲学、演劇、さらに科学や芸術にいたる幅広いジャンルに開かれていたこの雑誌は、その編集方針をこう述べていた。

ブルターニュにおけるナシヨナリズムの誕生 (二二)

この国に、宗教と道徳という、あの社会の基礎をなす二つの土台を置き直すこと。文学を善と美の泉に再び浸すこと。その冷笑的なペンでフランスを汚す卑劣漢の群れをフランスから追いだすこと。高尚な文学のキリスト教的・社会的思想をすべて再生させること。(……) 片田舎で四散したり埋もれたりしている知的資源をすべてひとつに集めること<sup>(37)</sup>。

さて、この方針はラヴィルマルケの向かうべき方向ときわめてよく合致していた。実際、一八三五年四月から一八三七年十月まで、彼がこの雑誌に寄稿した回数は十三回にも上るが、ここではまず一八三六年二月十五日に掲載された『ブリズー』*Brizeux*を一瞥しておきたい。ラヴィルマルケのブルターニュ観が、カトリックの伝統主義の影響を受けつつ、徐々にナショナルなものへと傾斜していくことを如実に示す興味深いテキストだからである。

冒頭からラヴィルマルケは詩人における「信仰」の必要性を強調する。いわく詩人に必要なのは「信仰の三つの純粋な光」、すなわち自分にたいする信仰、神にたいする信仰、自国に対する信仰である。

もし彼が自分を信じていれば、その作品はまるで忠実な鏡のように、そのひそかな想いを、その容貌を、その個性を、その性格を映し出すだろう。もし彼が本質的に宗教的なら、その声は神聖を称揚する司祭の声の力をもつだろうし、むしろその人は自国にたいする信仰ももつことになるだろう。彼はその生活習慣を身につけ、そのことばを話し、その衣装を身にまとい、好んでその国の最高の栄光とこのうえなく優しい魅力を、その目立たない美しさを歌うだろう。つまりその歌はナショナルなものになるだろう<sup>(38)</sup>。

ここで称揚されるのが、ほかならぬ中世騎士物語である。民衆歌謡のなかで育まれ、アーサー王や「円卓」の騎士やシャ

ルルマーニユといった「土地の人」が活躍し、そのすべての出来事が「宗教」の光の下に照らされるこの物語のなかに、彼は自らが言う「三つの信仰」のすべてを兼ね備えた文学の理想形を見る。しかしその理想もルネサンスによって遮られる。著者のルネサンスにたいする評価は手厳しい。この時代、フランス文学はギリシャ・ローマに熱狂するあまりその本道から外れ、「古典古代のうわべだけの模倣」に走った。それは複数の文明、複数の言語、複数の宗教に身を任せて、自らに固有の言語とその伝統と祖国と神とを忘れたのである。「十六世紀はまったくもって異教的な世紀であった。アンチ・ナショナルなこの世紀は、カエサルやアレクサンドルの功績を諳んじてはいても、自国の歴史は知らなかったのである<sup>39</sup>」。かくていったん迷妄のなかに沈んだフランス文学は、続くルイ十四世の時代になっても復活の兆しを見せない。のみならずこの時代の欠点はすべてつぎの世紀へと引き継がれ、過去を憎悪し宗教を冒瀆する最悪のヴォルテール主義を生み、やがて革命へといたる。しかしついにシャトーブリアンが来る。著者は彼をこう語る。

彼は王族と司祭と詩人と古のガリアの民とブルターニユ公の高貴な血を引き、その特徴を守り続けた。彼はアルモリカの砂浜を渡る大西洋の風に揺りかごを揺られた。彼は幾つもの海を渡り、ドルイドのように真理をもとめて新世界の森へと赴いた。(……) 彼はついに祖国に戻った、バルドヤトルヴェールの豎琴の調べにのせて、かつて行く手に用意されていたが、ルネサンスによって閉ざされたあの時代の扉を再び開くために。(……) もしシャトーブリアン氏がいなければ、われわれはいまだにルネサンスの桎梏を打ち砕くことはできなかったろうし(……)、キリスト教的な要素とナショナルな要素も依然としてわれわれの文学のなかに入ってはこなかっただろう<sup>40</sup>。

こうしてシャトーブリアンは、中世騎士物語の伝統へとまっすぐに結びつけられ、その継承者と見なされる。ちなみに

ルネサンスを批判し、中世とシャトーブリアンを称賛するのは、カトリックの伝統主義の常道であった。

もつとも、ラヴィルマルケがこう書いている時代のフランスとは、七月革命以降のフランス、シャトーブリアンによって回復された「キリスト教的な要素」と「ナショナルな要素」は再び危機にさらされているフランスである。実際、文学はイギリスやドイツやイタリアに範を仰いでその独自性を失い、宗教はまたも冒瀆され、歴史は祖国を侮蔑してはばからない、と著者は嘆く。しかし、彼はまたこうも言う。「急いで言おう。いまなお貞潔な魂は存在する」。そして、「ブリズーはそのひとりなのである」。こう語った後、ラヴィルマルケの筆は一気にその故郷へと飛ぶ。

フランスの先端に荒々しい未開の国がある。鬱蒼たる緑の森に覆われ、厚い茂みに包まれ、玲瓏とした谷が刻み、そこそこに見渡すかぎりの荒野が広がる。その彼方、視界の果てにはモンターニュ・ノワールの山並みが霧に霞み、山嶺には十字架や鐘楼や巨石が点在する(……)。絶えず嵐が荒れ狂う海が、飛沫をあげて押し寄せる(……)。「新世界」のように汚れを知らぬその土地の上に、やはり汚れを知らぬ民族が住んでいる。過去の遺物のような民族、古代ヨーロッパの名残をそのままにとどめる民族だ。長い髪と古い習慣と古い言語とドルイドの文明を残す民族(……)。この国こそ、われらが詩人の故郷にしてわれわれの故郷、ブルターニュなのだ<sup>(4)</sup>。

貞潔なのは詩人のみではない。そもそもその故郷が、そこに住む人が貞潔なのである、と著者は言いたいようだ。「この国のバルドはいつもブルターニュのことを歌った。中世のトルヴェールたちは彼らの歌をフランスに伝えた。騎士道文学はそのまま輝かしい登場人物ともつとも甘美な作品をここで得たのだ<sup>(42)</sup>」。そしてブリズーもまた「われわれの先祖の豎琴をまさに再発見したひと」として、これらアルモリカのバルドの末裔に列せられるのである。ラヴィルマルケは

言う。「『マリー』はブルターニュのレーを集めたものである。そのレーを結びつける絆は、愛、宗教、そして祖国に寄せ  
る想いなのである<sup>(43)</sup>」。

さて、ここで著者は「祖国」と言う。しかしこの「祖国」とは具体的にどこを指すのか。もちろん、この文脈において  
は、それはブルターニュ以外のものではありえない。実際、この論考では論が進むにつれてフランスは徐々に後景に退き、  
ブルターニュのみがクローズアップされてくる。ラヴィルマルケのブリズーにたいする称賛も、次第にブルターニュにた  
いする称賛と区別がつかなくなる。実際、著者は「ヨーロッパの開放、なかんずくフランスの州の開放<sup>(44)</sup>」の必要性を訴  
え、ブリズーによるつぎのような愛国的な詩句を引用してみせる。

そう、われわれはなおアルモリカの人間だ。

勇敢だが、しかし戦は好まぬ民族だ。

長い髪を背中に垂らし、

望むことを断固としてやり遂げる民族。

裏切り者を嫌悪する純粹なところをもち

イエスを、先祖の神を讃えて、

われわれは変わらず昔の歌を謡う。

ああ、われわれは最後のブルトン人ではない。

おまえの息子たちの古い血はいまもわれわれのうちに流れる、

ああ、樫で覆われた花崗岩の土地よ<sup>(45)</sup>。

シャトーブリアンがフランス文学のなかに取り戻そうとした「キリスト教的な要素」と「ナショナルな要素」は、こうしてほかならぬブルターニュのうちにその理想的な融和を見いだすのである。「ナショナルである」ことは、ここではもはやフランス人であることを意味しない。それは端的にブルトン人であるという自覚をもつことなのである。ブリズーはフランスではなく、まさにブルターニュを歌う詩人であるがゆえに称賛されていたのだ。

そして、こうした著者の姿勢は、つぎの『バルディスムの名残』でさらに極端な方向に向かうことになる。

### 『バルディスムの名残』

『バルディスムの名残』 *Un débris du Bardisme* が掲載されたのは、『ブリズー』から一カ月後、一八三六年三月十五日付の『エコー・ド・ラ・ジュエヌ・フランス』においてであった<sup>(46)</sup>。

この論考は最初『両世界評論』 *Revue des Deux Mondes* に送られたものの、掲載を拒否されたといういわくつきのものだった。同誌の編集長フランソワ・ビュロ François Buloz が送った断り状にはこうある。「こうしたテーマは読者にとってあまり馴染みのないものなので、さらに詳しい説明が必要かもしれませぬ。というわけで、私にはあまり興味を惹くものとは思えませんでし、ここにある考え方は、われわれフランス人にはなかなか受け入れ難いもののようにお見受けしました<sup>(47)</sup>」。

では、何がビュロをとまどわせたのか。ラヴィルマルケはそこでこんな風に語っていたのだ。

アンヌ・ド・ブルターニュが王冠のためにわれわれをフランスに売った日、彼女のせいで不幸な祖国の上に解き放たれた、人が進歩の名で呼ぶフランス文明の大波が、われわれの自由の防波堤をついに流し去ってしまったあの日、ブル

ターニユの精霊もまた眠りについたので。以来、われわれの言語と文明は生氣を失い、習俗は腐敗し、文学はずたずたに引き裂かれ、われわれのナシヨナリテは消え去った。しかもこの大波はさらにその高さを増し、止むことがない。いそいで一瞥を、最後の愛の一瞥を投げかけよう。沈んでいくわれわれの国に、消え去っていく古の太陽に<sup>(48)</sup>。(……)

フランスに隷従させられ、自由を奪われたわれわれが、独自のナシヨンを形成することを止めたいま、われわれにとつて正確な意味でナシヨナルな文学はもはやない。重要な出来事については、いまなおそれを語るグウエルスやソーン<sup>(49)</sup>があり、その記憶を伝えるために、われわれの歴史はなお民衆によって謡われる歌という表現を失っていないのだ。しかしわれわれは、もはやわれわれの先祖のように、新しいバルザス<sup>(50)</sup>やレーをつくることはほとんどない。バルドたちの豎琴は打ち砕かれ、歌は散り散りになり見失われてしまった。そして、いまやわれわれは、山々の上や辺鄙な片田舎でしかそうした歌に出会うことはない。

そこでのみ、ケルト民族は昔の姿をとどめているのだ。そこ、野山の丘の上、ドルメンや十字架やドルイドの墓やキリスト教の遺産のなかに、彼らはいるのである。女性たちはいまなお貞潔で、男たちはいまなお誇り高い<sup>(51)</sup>。(……)

街と接触がなく、フランスの影響を免れている山奥や奥深い谷間で、過去が現在のうちに生き続けている。昔ながらの言語や文明、遠い記憶や歴史を歌った古い歌は、そうした場所で、文字通り貧しく、不幸ではあるが、黙々とその運命を甘受し、希望を失わぬ人々のおかげで救われたのだ。なぜなら彼らはキリスト教徒であり、この世を越えたところになにかがあるということを知っているのだから。過去の遺物のような人々、高慢な無知が野蛮人の群れとしか思わなかったこうした人々のおかげで、それは救われたのだ。われわれ野蛮人！先祖の骨をまるで聖遺物のように後生大事に抱えているわれわれ！神と祖国と自由を愛するわれわれ！敵が打ち負かすこともかなわず、敵に売られることもなかったわれわれ！ああ、われわれよりも文明化した支配者たちは、過去を嘲り、先祖の灰を風に飛ばし、十字架を、

墓を打ち碎き、「神はいない」と叫びながら、地面を掘り返すのだ<sup>(52)</sup>。(……)

いや、わが祖国よ、おまえはもはや自由ではない。とまれ、われわれは足枷を嵌められたおまえを讃えよう。われわれの命、二十の世紀にわたってわれわれがおまえの大義のために流してきた血は、いまなおおまえのものだ。ああ、いま一度われわれの血を流せるなら。おまえがそれをつけたまま老いなければならぬ鎖を、打ち砕くことができるなら(……)。フランスはわれわれのおまえへの愛を噛うだろう(……)。しかしわれわれはフランスの腹から生まれたのか。フランスの乳を呑んだのか。わかっているだろうか、この外国女がわれらの先祖に身をまかせにやって来たとき、手に短刀を隠しもっていたのを。いまなお、この女はわれわれを虐げ、殺めているのを。いや、いや、ああ、わがブルターニュよ(……)、われらが母よ、われわれはおまえの胸のなかで死にたいのだ<sup>(53)</sup>。

さて、先に『ブリズー』において称賛されたナショナルな姿勢は、ここで一気にフランスとブルターニュを敵対させる過激なナショナルリズムへと飛躍する。そこには、たとえばルイ・ド・カルネの論考に見られたような、独立国家としてのブルターニュには一切重きをおかない冷静な姿勢はない。それどころか、ブルターニュの独立の喪失は、かつて独自の信仰と言語、文明と文学を誇ったケルト民族の末裔としてのその「ナショナルリテ」の消滅であり、フランスという異民族の侵入のはじまりなのである。ラヴィルマルケはここでブルトン人を、フランスの一部となったものの、その文明の侵入に抵抗し続ける人々として、のみならずいまだにフランスからの解放を希望する人々として描くのである。

こうした主張の根拠となるのが、ブルターニュの辺境の住人によって伝えられる口頭伝承である。著者は、そうした場所に行けば、老人がブルターニュの王グランドロンのことや、アーサー王のこと、彼のサクソン人や巨人との戦いのこと、来るべき彼の帰還のこと、さらにはトリストタンやイゾルデのことなどを語ってくれるだろうと言い、さらにこうつけ加え

る。「その老人はあなたにフランス人やイギリス人にたいするわれわれの憎しみを、われわれの悲惨な現状を、われわれの失われた自由とかつての栄光を、延々と話すことだろう<sup>(54)</sup>」、と。バルデイスムは、それが「歌われる歴史」である以上、敵にたいする積年の恨みを、また民族の栄光と誇りを語り継ぐ場ともなるというわけである。

それにしても、この論考の激しく、ときに挑発的ですからある調子にはやはり違和感を拭えない。なぜラヴィルマルケはこうした口調で語らなければならないのだろうか。このテキストが一月に会見したばかりのメリメに向けられたものだと考えてみることもできる<sup>(55)</sup>。この論考は彼にたいする一種の返答ではないのか。なによりも、それをまず『両世界評論』に送ったという事実が、著者の意図を明白に物語っているのではないか。メリメは一八三四年以来、この雑誌に多くの小説を発表しており、しかもこの雑誌の編集室はメリメのアパルトマンと同じ建物のなかにあった<sup>(56)</sup>。つまり『両世界評論』はあらゆる媒体のなかでもっともメリメに近い雑誌だったのであり、ラヴィルマルケはそこにこの論考を真っ先に送りつけたのである。しかも先に引いたビュロの手紙は二月十九日の日付である。この論考はメリメとの会談の興奮がまだ冷めやらぬうちに書かれたと考えていい<sup>(57)</sup>。口調が多少挑発的になるのも無理はなかったのである。

しかし、むろん著者の目的はたんに報復にあつたわけではなかった。アルフレッド・ド・クルシーが語るこんな逸話がある。ある日、ヴィクトワール通りの「屋根裏部屋」にやってきたラヴィルマルケは、壁に掛かっているアンヌ・ド・ブルターニュの肖像画を見て、「君はこの女をかくまうわけか」と大声を出した。「なぜいけないんだ」と訊くクルシーに、彼は「この女がわれわれをフランスに売ったんじゃないか。もし彼女がいなければ、ブルターニュはまだ独立国だったかもしれないんだよ」と答えたという<sup>(58)</sup>。

『バルデイスムの名残』は、紛れもなくラヴィルマルケのうちで高揚しつつあつたナショナリズムの一面を捉えたものだったのである。もちろん、それを二十歳の若者の若氣と判断することもできよう<sup>(59)</sup>。しかし、いずれにせよ、ブルター

ニユの歴史において「かつて考えられたことはあったかもしれないが書かれたことのなかったこと<sup>(6)</sup>」が、ほんごついに書かれてしまったということだけは確かであった。

(りく)

註

- (1) 大革命以降におけるブルターニユ像の変遷を扱った代表的な論考としては、Catherine Bertho, «L'invention de la Bretagne, genèse sociale d'un stéréotype», *Actes de la recherche en science sociale*, N° 35, 1980, pp.45-62.
- (2) この作家はブルターニユを舞台とした小説を三篇書いている。他の二篇については、Guy Eder *ou la Ligue en Basse-Bretagne*, 1830; *Le Marechal de Raiz*, 1834. Cf. *Ibid.*, p.59.
- (3) Cf. Emile Souvestre, *Les Derniers Bretons*, t.I, Terre de Brume Editions, 1997, pp. 26-27.
- (4) たことばは「州の隠遁者」シリーズの一冊として広く読まれたド・ジュイE. de Jouyの『ブルターニユの隠遁者』*L'Ermite en Bretagne* もついでだった。
- (5) Balzac, *Les Chouans*, «Bibliothèque de la Pléiade», t.VII, Gallimard, 1950, pp.777-778.
- (6) *Ibid.*, p.776.
- (7) *Ibid.*, p.778.
- (8) *Ibid.*, p.780.
- (9) F. Cooper は北米インディアンを題材にして小説を書いたが、なかでも一八二六年に仏訳された *Le Dernier des Mohicans* が有名。バルザックは *Les Chouans* を書くに当たって、とりわけ *Roman de Bas de Cuir* からインスピレーションを得たと伝えられている。
- (10) *Lycée Armoricaïn*, I, p.3.
- (11) Cf. Catherine Bertho, *op. cit.*, pp.51-53; Dominique Besançon, *Anatole Le Braz et «La légende de la Mort»*, Terre de Brume Editions, 1996, p.21.

- (12) Auguste Brizeux, *Marie*, Paul Masgana, 1840. なお、この詩集には一八三二年版、一八三六年版、一八四〇年版の三つの版があり、相互の異同も無視し得ぬほど多い。しかし残念ながら、筆者は今回一八三一年版を参照することはできなかった。
- (13) *Ibid.*, p.42.
- (14) *Ibid.*, p.47.
- (15) *Ibid.*, p.7
- (16) *Les Derniers Bretons* は一八三五年から一八三六年にかけて Charpentier 書店から四巻本として出版された。レオン、コルヌアイユ、トレギエ、ヴァンヌというブルターニュの各地域ごとの風俗習慣を活写した第一部、ブルターニュの詩をテーマとした第二部、産業・商業・農業を扱った第三部からなる。
- (17) 一七六七年、レンヌ生まれのデュヴァルは、前回紹介した *Assurances générales* の Auguste de Gourcuff と並ぶパリのブルトン人の庇護者的存在であった。ブルトン人であることに強い誇りを抱いていた彼は、文学への志を抱いて上京する同郷の若者たちのデビューを助けていた。また彼は一八三〇年から上級司書としてアルスナル図書館に勤務してもいた。
- (18) Emile Souvestre, *Les Derniers Bretons*, t.I, Terre de Brume Editions, 1997, p.33.
- (19) *Ibid.*, pp.33-34.
- (20) *Trois Femmes poètes inconnues* (1829), *Rêves poétiques* (1831), *Sur les Arts, comme puissance gouvernementale* (1831) の三冊である (cf. *Ibid.*, p.11)。
- (21) ラヴィルマルケのフィールドノートを詳細に分析したドナシャン・ロランは、一八三三年の日付をもつ明らかにラヴィルマルケによって書き留められた歌が二葉残っていると報告している。つまりラヴィルマルケはパリに出る以前からすでに収集に手をつけていたのである。しかしこの時期の収集が明確な目的のもとになされたとは考えにくい。おそらくは母親の影響下で見よう見まねでせじめられたものである (cf. Donatien Laurent, *Aux sources du Barzaz-Breiz*, ArMen, 1989, p.35)。
- (22) Cf. *Ibid.*, pp.16-20; D. Laurent, «La Villemarqué et les premiers collectes en Bretagne», in : Fanch Postic (éd), *La Bretagne et la littérature orale en Europe*, Centre de Recherche Bretonne et Celtique/ Centre de Recherche et de Documentation sur la Littérature Orale, 1999, p.155; *Aux sources du Barzaz-Breiz*, ArMen, 1989, p.156-157.

- (23) たとえば、F. Gourvil はじぎのように推測している。「彼（ラヴィルマルケ）がこの重要な論考を読み、それが雑誌に掲載された最初の日曜日に、クルシー兄弟の「屋根裏部屋」でこの本が話題になったとき、おそらくそのときにラヴィルマルケの方向性は決まったと言っている。この論考にはブルトン語からの翻訳しか載っていない（というより載せることができなかった）。そこにいた誰かが「ブルターニュがほかの国に匹敵するような民衆歌集をもっていないのは残念だ」と言ったにちがいない。われらが若き審美家がこの議論に加わらなかったはずはないし、そのとき「君は明らかにこの仕事に向いているし、この会のなかで自由に時間を使えるのは君しかいないのだから、ひとつこの欠落を埋めるような本を出してみないか。そうすれば君の名も高められるし、故郷の名も高められる」と、その気にさせられたにちがいなかった」（Francis Gourvil, *Théodore-Claude-Henri Hersart de la Villemarqué et le «Barzaz-Breiz»*, Oberthur, 1960, p.13）。
- (24) D. Laurent, *op. cit.*, p.283.
- (25) *Ibid.*, pp.39-40.
- (26) この名前に関しては、Guinclair, Gwenc'han, Gwynglaff など *qu* の綴りがあるが、ここでは「ガントラン」と呼び名を統一した。
- (27) J.-Y. Guionar, «Le Barzaz-Breiz», dans *Les Lieu de mémoire*, (sous la direction de Pierre Nora), Gallimard, 1992, t.III, vol.2, 1992, p.537.
- (28) Gourvil はケルダネに宛てたラヴィルマルケの手紙が九月二十日に投函されており、メリメがカンペールに到着したのが同じ月の十五ないしは十六日であることから、おそらくレヌヴァンからプレシに帰る途中にカンペールに寄ったラヴィルマルケが、カルネとの会話のなかで、近々発見することを見越して、すでに見つけたことを匂わせるような発言をしたのではないかと推測している（cf. *Ibid.*, p.39）。
- (29) F. Gourvil, *op. cit.*, p.22. なお、ここでは「ガントラン」の綴りは *Quin-Clan* になっている。
- (30) たとえば、十月三十日付の『エルシーヌ』は「メリメ氏は町長の同意以外のいかなる手続きも経ずに、ブルトン語で書かれたわれわれの有名なバルドの写本を奪い取り、ポケットに入れたのである」と報じ、「若き考古学者に何ができるであろう」と問いかけてくる（cf. Prosper Mérimée, *Notes de Voyages*, Edition Complète du Centenaire, Librairie Hachette, 1971, p.250）。
- (31) F. Gourvil, *op. cit.*, p.40.

(32) メリメは『オクシリエール・ブルトン』*L' Auxiliaire breton*に「つぎのような弁明の手紙まで送っている。「私が言えるのは、私はそれを見たこともないし、いまだに彼がどこでそれを見つけたのかさえ知らないということです。加えて、私もし政府のためにそれを獲得する機会があったとしても、それを秘密にしなければならぬ理由などありませんし、そもそもその写本がそれを出版できる人の手に渡ってさえいれば、私にはもう十分だったのです」(Prosper Mérimée, *op. cit.*, pp.250-251)。

(33) *Ibid.*, p.41.

(34) Bernard Tanguy, *Aux origines du nationalisme breton*, vol 1, Union générale d'éditions, 1977, p.50.

(35) J.-Y., Guionmar, *op. cit.*, p.537.

(36) *Ibid.*, p.532. なお『フランス文学史』に関する記述はこの論考の pp.529-534 にかけての記述を参考にした。

(37) Pierre de la Villemarqué, *La Villemarqué, sa Vie et ses Œuvres*, Champion, 1926, p.261.

(38) *Echo de la Jeune France*, 15 février, 1836, p.166

(39) *Ibid.*, p.167.

(40) *Ibid.*, p.168

(41) *Ibid.*, p.169

(42) *Ibid.*

(43) *Ibid.*, p.177.

(44) *Ibid.*, p.178.

(45) *Ibid.*, p.179.

(46) この論考には『エリアンのペスト』*La Peste d'Éliam*という歌が紹介されており、雑誌の巻末にはハープとピアノ用の楽譜が付録として付けられていた。ちなみにこの歌はラヴィルマルケが公にした最初の民衆歌であったが、また彼の母が収集した最初の歌でもあった。ラヴィルマルケはクルシー兄弟の「屋根裏部屋」の集会で好んでこの歌を謡ったという。

(47) P. de la Villemarqué, *op. cit.*, p.28.

(48) *Echo de la Jeune France*, 15 mars, 1836, p.264.

- (49) この綴りは *zonn* となっているが、混乱を避けるため日本語表記は「ソーン」に統一した。
- (50) *barzas* という綴りで、この論考で都合六回登場するこの語は、ラヴィルマルケが「民衆歌」の意味で好んで使ったものだったが、実は彼の造語であった。ちなみに『バルザズ・ブレイス』の初版の原題は *Barzas-Breiz* である (cf. F. Gourvil, *op.cit.*, pp.362-365)。
- (51) *Echo de la Jeune France*, p.267.
- (52) *Ibid.*, p.269.
- (53) *Ibid.*, p.275.
- (54) *Ibid.*
- (55) この説を唱えるのは B. Tanguy である。「この痛罵がまず仕返しであったことに疑問の余地はない。その執筆と出版の状況がそれを示しているし、幾つかの箇所はメリメの言葉にたいする直接の返答のように思える。著者はそれをメリメの口から聞いたのだろうか。それとも誰かから伝え聞いたのだろうか。それを明言することはできない」(B. Tanguy, *op.cit.*, p.53)。
- (56) *Ibid.*, pp.51-52.
- (57) B. Tanguy, «Des celto-manes aux bretonistes: les idées et les hommes», dans *l'Histoire littéraire et culturelle de la Bretagne*, Champion-Slatkine, 1987, t. II, p.301.
- (58) F. Gourvil, *op.cit.*, p.30.
- (59) たとえば、オードラン・ド・ケルドレル Audren de Kerdelは、ラヴィルマルケの死後、一八九六年にサン・ブリウーで行なわれた「ブルタニユー協会」における追悼演説でこの論考に言及し、「いささか地方性を誇張しすぎ、いささかブルターニユにたいする盲目的愛国心に走りすぎた。二十歳という著者の年齢を考えれば仕方のないことだが」(*Bulletin Archéologique de l'Association Bretonne, Troisième série, Tome quinzième, 1897, p.XVII*)と述べている。なおラヴィルマルケの息子ピエールによる伝記には、奇妙なことにこのケルドレンの文章がほぼそのまま引用符なしで地の文に使われている (P. de la Villemarqué, *op.cit.*, p.29)。ちなみに B. Tanguy はこの箇所をそのまま息子ピエール自身の感想と考えて論を進めている (B. Tanguy, *op.cit.*, p.52)。
- (60) F. Gourvil, *op.cit.*, p.24.